

≪専修人の新しい本≫

ロスト・チャイルド

桂 美人著

迫力満点の導入部 移植のヒロインも魅力



『栄光一途』で新潮ミステリー倶楽部賞、『犯人に告ぐ』で大藪春彦賞をダブル受賞した栗井脩介(平3文)、『果てしなき渇き』で「このミステリーがすごい」大賞を受賞した深町秋生(平10経済)など、この数年、ミステリーの世界で専修大学の卒業生の活躍が目立っている。今回は、商学部の女子卒業生が初めて横溝正史ミステリー大賞を受賞した。桂美人の『ロスト・チャイルド』(角川書店)である。

権田萬治元文学部教授に同書を紹介していただいた。

『ロスト・チャイルド』の第一の魅力は導入部の迫力満点の設定にある。武装した外国人犯人グループが東京大塚にある監察医務院の解剖室に押し入り、立ち会いの速水警視を銃撃、慶応大学助教授で非常勤監察医の神ヒカルらを取るといふ重大事件が発生。警視庁は特殊部隊SATを起用して人質を救出する。この辺りはスリルとサスペンスに溢れていて面白い。

もう一つの魅力は一種の探偵役を務める神ヒカルという美人の法医学者の個性的な肖像である。女性の法医学者は、サラ・ケンプが作り出したティーナ・メイやコーンウェルのスカーペッタ検屍局長シリーズなどがよく知られているが、男言葉を使うヒカルは良い意味でも悪い意味でも異色だろう。

ただし、この事件がなぜ引き起こされたのかという謎と関わるこの作品のテーマは、法医学ではなくて、生命科学であり、遺伝子操作などによる難病の治療や生殖医療の問題である。これも一つの魅力だろう。

先端科学の問題として興味深いのだが、やや整理不足なのか、ちょっと分かりにくいし、国際的スケールの事件が最後の方で、血の悲劇というふうに戻す癖になるのは残念である。

小説技法の面では、問題がないとはいえないとしても、この作品にはこれまでの日本のミステリーにはない斬新な味わいがある。これからが楽しみである。

権田萬治＝評論家。ミステリー文学資料館館長。元文学部教授。横溝正史賞の選考委員を1996年まで10年間務めた。

山のある家 井戸のある家

きむ ふな訳

日韓を代表するふたりの女性作家による味わい深い往復書簡。昨年1年間、両国の文芸誌に連載した24通を一冊にまとめたもので、連載を企画し、日本語と韓国語の両翻訳を務めたのがきむふなさん(平16院文博)だ。



作家は、東京の井戸のある家の津島佑子さんとソウルの山の上に住む申京淑(シンギョンスク)さん。四季折々の暮らし、子ども時代の回想や家族への思い、政治・社会問題、文学観が繊細でしなやかな言葉と表現でつづられ、ふたりの間に理解と共感が熟成されるのが伝わる。「翻訳を通じての『対話』の言葉がひとつひとつ、しっかりした足取りで近づき、固有の声になって響き合う」と津島さんがあとがきで記した。申さんも、きむふなさんの見事な仕事をたたえている。(集英社・本体1900円＋税)

《専大校友を訪ねて》

布団の中で小説書いた少女時代



— 第27回横溝正史ミステリ大賞受賞・作家デビュー
桂美人(かつらびじん)さん(平8商)

ヒトクローン胚(はい)、警察公安組織・特殊部隊、謎の科学財団、国際テログループ、法医学のスーパーウーマン……。受賞作『ロスト・チャイルド』では、さまざまな分野の要素と登場人物を縦横に絡み合わせ、「生命」へのあくなき探求を疾走感あふれる筆致で描いてみせた。

「正直、大賞は無理とっていました。一つの器に欲張って詰め込みすぎたかなと」

受賞後の対談で桐野夏生さんから「書き手が読みたいテーマを、奇をてらわず表現したところがいい。欠点はマイナスとせず、課題として心にとめて」と肩をたたかれ、受賞のとまどいが次作への意欲に変わった。

福井県の越前町出身。十代のころ、夜寝る前に布団の中で少女小説をノートに書きためた。「100枚で100万円」のコバルト・ノベル大賞が目標だった。

地元の商業高校から故郷を離れて専大に進学。新聞奨学生などで働きながら学んだ。

貿易が主題の前田和寛ゼミでは個人輸入にチャレンジ。英語研究会ESSに入会、学外のマスコミ塾にも通った。「見るもの聞くもの何もかもが新鮮で。大学時代は一番本を読まなかった時期ですが、書物からは得られない世界が広がりました」。

大手出版社からビジネス系コンサルティング会社に勤務、学習塾の講師や司法試験にも挑戦。現在は外食産業の経理の仕事に就く。いつも本が傍らにあり、少女時代の夢はついえなかった。

哲学、戦記もの、古代ローマなどの歴史ものと、どちらかというと硬質のジャンルが好き。座右の書は中島敦の『山月記』。一字一句書き写し、味わい尽くした。特に「人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという」のくだりは、読むたびに重い響きが伝わる。

次作のテーマは宗教。「人間そのものを描きたいと思ったら宗教になりました。体当たりでぶつかっているところです」。

「相馬学術奨励基金」

第23回研究員に石坂・北短教授

相馬勝夫元総長(故人)の寄付を基に、本学出身の若手研究者の海外派遣等を目的に設けられた「相馬学術奨励基金」の第23回海外研究員に、石坂信一郎・専修大学北海道短期大学教授＝写真＝が選ばれ、9月から6か月間、ウーロンゴン大学(オーストラリア)で「オーストラリアにおける公会計制度の研究」をテーマとする調査・研究を行う。

石坂教授は、1991年専修大学大学院商学研究科修士課程修了。92年専修大学北海道短期大学講師、97年助教授、2007年教授。



布団の中で小説書いた少女時代

《校友新社長紹介》

石原坂 多間氏(いしはらざか・たもん=昭49商)

(株)カウボーイの社長に8月3日付で就任。同社は北海道を地盤に、食品を主体としたディスカウントストアを展開している。

セクシュアル・ハラスメント防止委員会から

相手の立場に立って物事を考える

防止委員となったことで、セクハラ関連の新聞記事に目を向ける機会が多くなりました。記事内容から、事件の背景などをすべて読み取ることはもちろんできません。しかし、どの事例も似たような単純な理由から発生していることがたいへん多く、「なぜ？ それもいまだに……」というのが率直な気持ちです。

1986年に発生した「西船橋駅ホーム転落死事件」(女性に絡んだ泥酔男性がホームに転落して死亡した事件。女性は裁判で無罪確定)が大きなきっかけとなって、「セクハラ」という概念が日本でも一般的に知られるようになったと言われています。その後、大学などではアカデミックハラスメントやパワーハラスメントなど、セクハラ以外のハラスメント(嫌がらせ)にも注目が集まるようになりました。しかしながら、ハラスメントに対する新たな認識が生まれてきたにもかかわらず、ハラスメントの代表格であるセクハラが20数年経過した現在でも数多く発生しているのが実情です。本学においても、セクハラに関する相談事例が多少なりとも存在していることは非常に残念であると感じます。

そもそもセクハラとは、「相手の意志に反して不快や不安な状態に追いこむ性的なことばや行為」などを指します。セクハラに限らず、ハラスメントのすべてに共通しているのは、「相手の立場に立って物事を考える」という人間としての基本的な品性(人権感覚)の欠如ではないかと私は思っています。こうした基本的な考え方のもと、本学から、セクハラのみならず「アカハラ」や「パワハラ」といった他のハラスメントについても同様に消し去っていきたいものです。

(教務課 森田隆浩)

「健康フラッシュ」

若い人も“メタボ”？

「メタボリックシンドローム」って、聞いたことがありますか？

それは、腸の周りなどに溜まり過ぎた内臓脂肪の悪影響により、高脂血症、高血糖、血圧高値のうち、二つ以上当てはまる状態を指します。国民の約10人に1人が該当するだろうといわれ、一つひとつの異常の程度は軽くても、複数重なると動脈硬化が進み、心筋 \times ルビ(ルビ=こう梗そく塞や脳卒中)のリスクが高くなります。

筋肉の下にあるので、つまみにくい内臓脂肪。これが付き過ぎているかどうかの目安は、ウエストサイズ(おへその高さの腹囲)が「男性85cm以上」、「女性90cm以上」です。

内臓脂肪が増えるのは、食事から取り入れるエネルギー(摂取エネルギー)が、運動や日常活動で燃焼するエネルギー(消費エネルギー)よりも多い状態、すなわちエネルギーの過剰摂取が原因なのです。内臓脂肪は、溜まりやすい反面、食生活の乱れや運動不足などを改善することで、減らしやすいのが特徴です。

あなたの生活習慣をちょっと見直してみませんか。体重・ウエスト日記をつけるとか、通学時間を運動時間として、学校の行き帰りには階段を使い、食事は1日3食規則正しく、栄養バランスの良い適正カロリーの食事をゆっくり、よく噛んでなどと、身近なところから一歩ずつ、今から将来に向けて「健康貯金」を始めてみませんか。

ただ、むやみにダイエットや運動をすると、かえって健康を害することがあるので注意しましょう。

(保健室)